

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

17

東晉書名所圖

五

本名目

水曾路名所圖會卷之五

目錄

江府日本橋
 釜ヶ谷
 大森
 神壽
 子安社
 神供社
 幸社
 鹿島
 山神社
 常陸帶神事
 鹿島七不思議
 所経塚
 廣圓寺
 玉造
 鹿島
 鹿島神社
 要石
 高天原
 鹿島年中行事
 八幡
 野銅駒
 桑船場
 香取神社
 香取山寺
 白井
 八幡宮
 坂東を郎
 息栖社
 霞浦
 子安社
 神供社
 幸社
 鹿島
 山神社
 常陸帶神事
 鹿島七不思議
 所経塚
 廣圓寺
 玉造

水曾路名所圖會卷之五目錄

[illegible]

本為子目一



金ヶ原

井田

夕陽の光

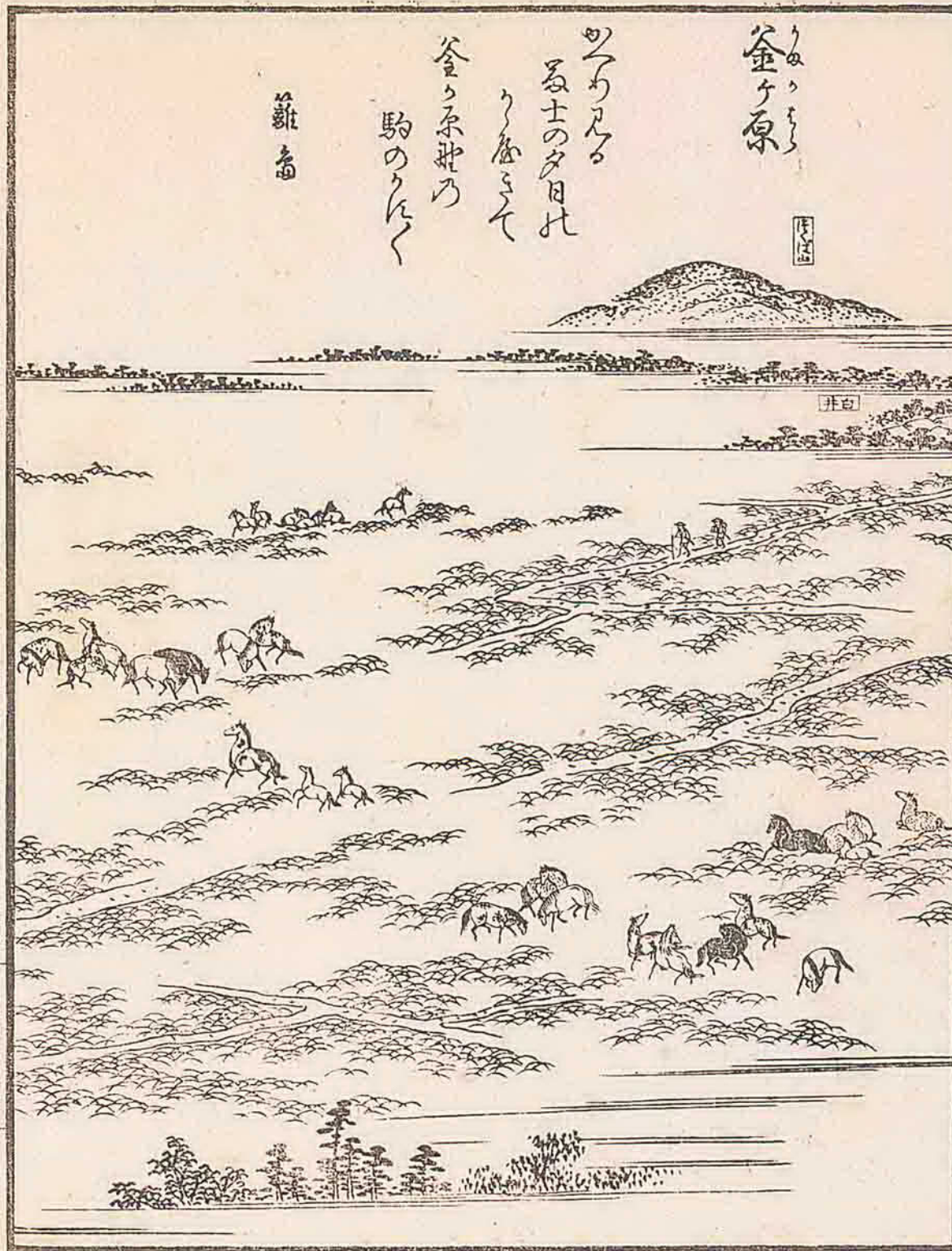
馬士の夕日

うきうき

谷う原野の

駒のうき

難



けしき

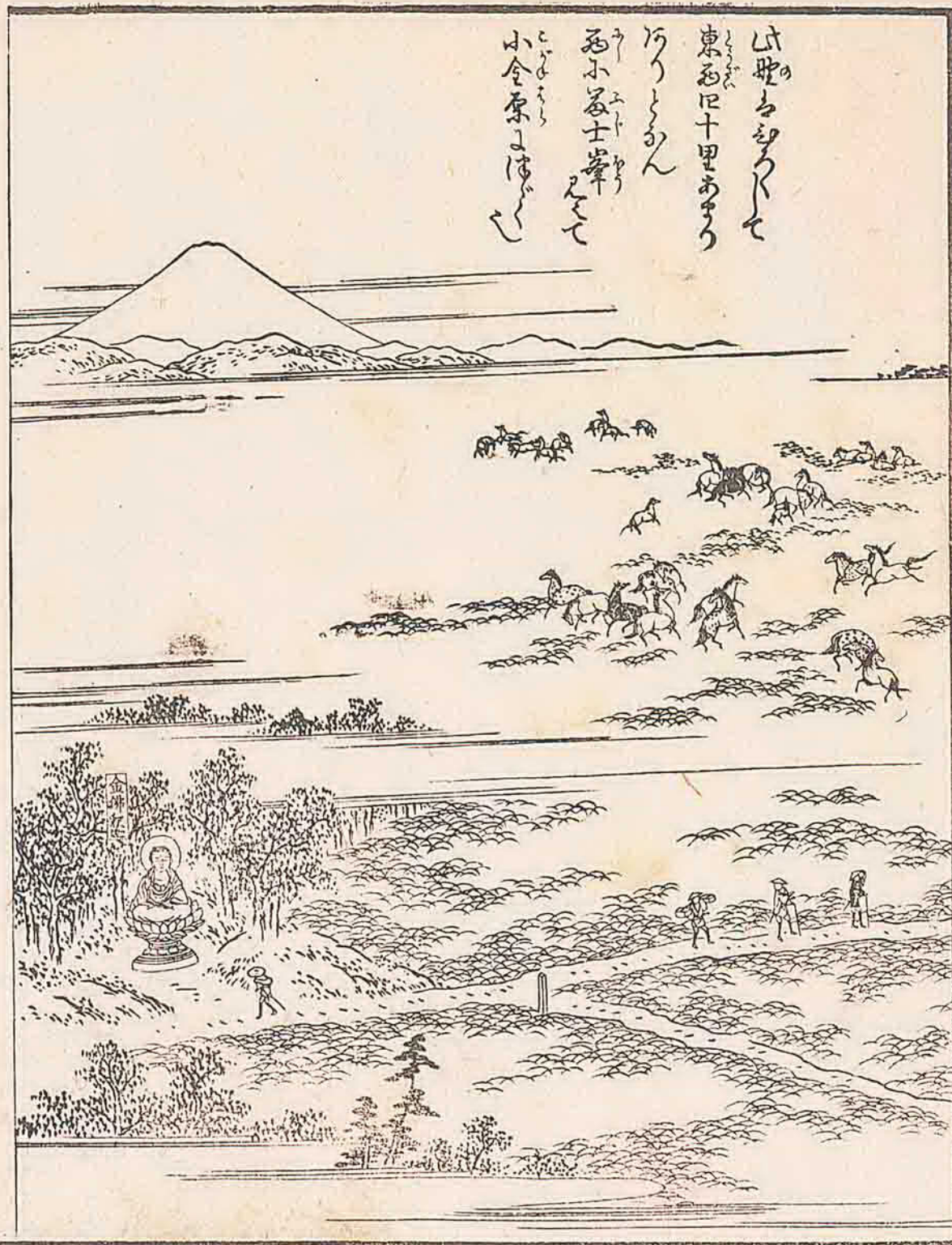
東に十里あり

けしき

西に十里あり

小令原

小令原



木曾路名新圖會卷之五

紅日本橋戸

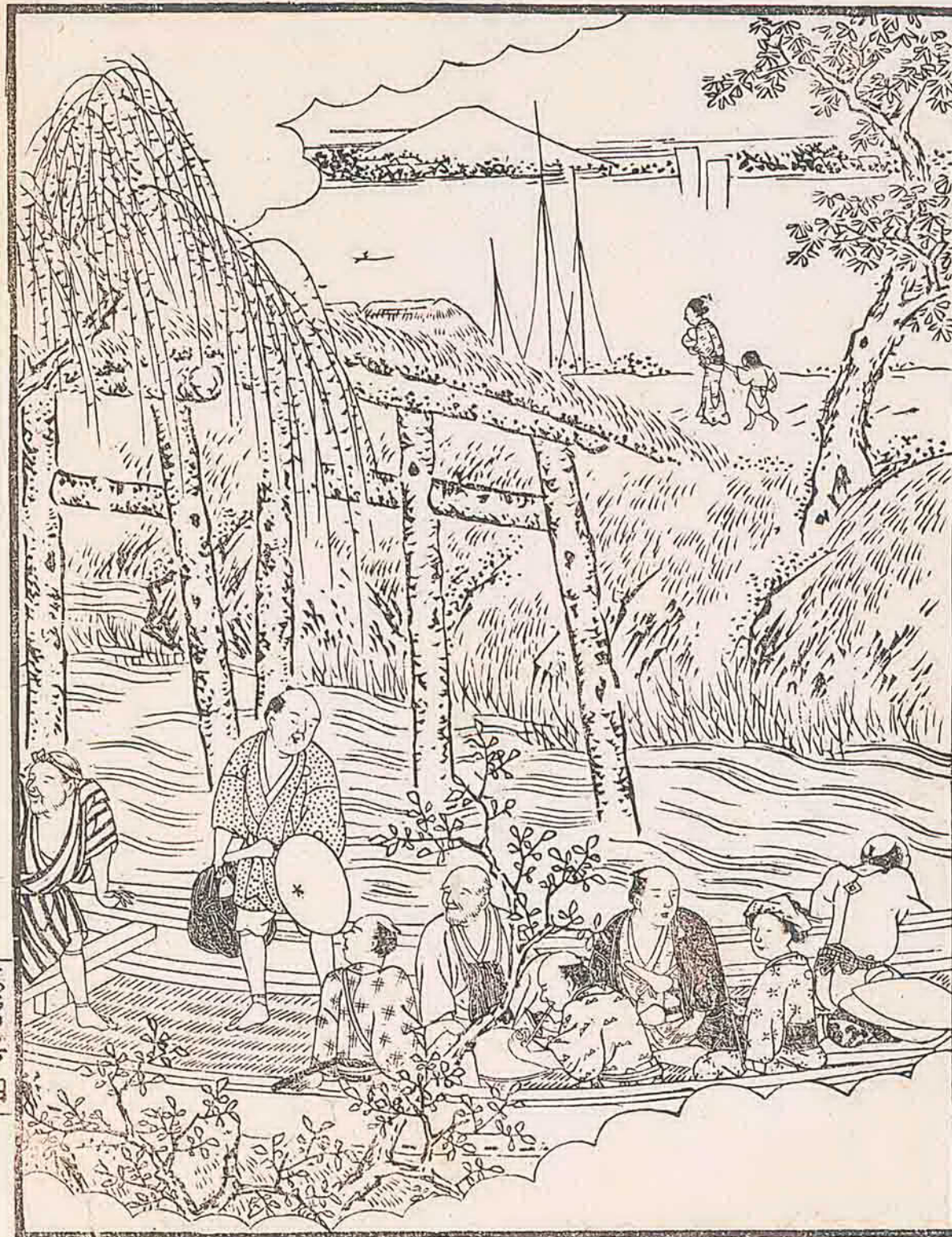
吾妻の神社香取息極麻多形と指せんて日本橋の邸屋と云ふ
て行徳の宿人形と云ふ人々小細町二丁目の河原より船を渡
りて幸あらば川と大河筋の枝川より名張小名本川より名張
度等より船より左の土橋町とて工場の家々は町より五百羅漢の
御寺ありて飛舟戸の土井も程とて中川の御園所より守屋殿
をとりてゆとて人々も水も人々も水も人々も水も人々も水も
船ありて中より老翁とて船を賣とすむ忽ち河の中流より水も
ゆけく河の岸を見れば若の美奈もとてつて若の美奈もとて名
り也とてつて水も人々も水も人々も水も人々も水も人々も水も
本宿屋の中流より船とて水も人々も水も人々も水も人々も水も
八幡やとて水も人々も水も人々も水も人々も水も人々も水も
いひりふとて水も人々も水も人々も水も人々も水も人々も水も

下行徳

下八幡橋

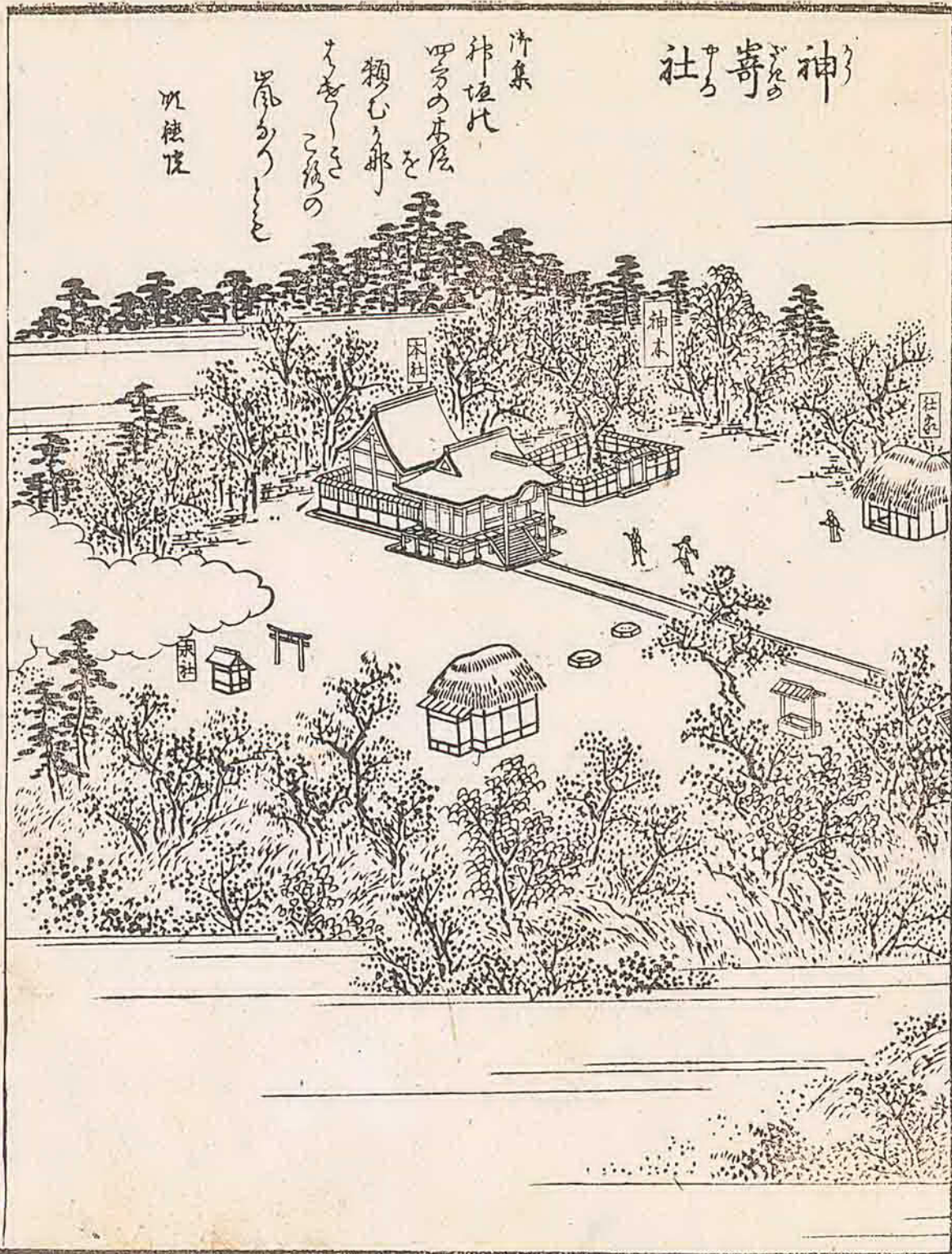
足利半一の子草鞋土中へ顔の湯舟おにやとて目録の度きと
道のりありて水橋人より野原とてとて通ふ都のりて水
橋より白雲をふたつとて夕日のりて水とて雲とて水とて水と
らに水八幡とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
金ヶ谷やとて二里八町は里の中より水とて水とて水とて水と
路より前の生と神とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
く水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
て水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
田原より水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
楊より水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
戸より水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
く水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
て水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と
て水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水とて水と

本
風



神寄社

清集
 神垣此
 四方の志屋
 頼む所
 心をこめて
 風あつて



舟をこぎしりて方へり小舟は浪の雲根小舟は抱く為の
 方小舟まり風流うてみ雲根家々たる海舟ありて身ふり
 義と師い頭少葵多冠冠二葉の将舟より中を横流舟持うて後
 浪の水清くば系綴波消るる滑る我足をはたさるる風を釣る
 漁父あり竿波下りて輕船紐のたぐひは釣ふ三ふゆを換りて好念を
 く芦色の中といふるす唐書小全麟と獲る月舟持うて帰る有る
 一釣の縁の外利名将く三尺の遠回天地中揚柳の月鳥うて孤舟獲
 蒼花の風軟くわけて雪波はるる易林と輕波釣く仲友を食く花
 意の鰓を釣て曹公成器い波浪遠く出く巨鱗を釣るある用
 形の新ある漁笛をふりし鷗さび下りて波の浪小求ふ釣器く陰
 浪やふるる大舟波撃く凄涼くして古今の悲成をさげはけり
 月ふさうたある舟と只舟よきさびくひるる様雲のめれど浪濤
 洲の岸ふさく朝日のさふ浪の面さくくして撒取るる舟を若同

下
香取

香取の浦小舟は地中総の地續りたば下総小属にさ終る
 神社すで陸地十八町あり

香取浦

香取の浦小舟は地中総の地續りたば下総小属にさ終る

香取太神宮

香取郡小湊産近喜式名神大

祭神 経津主命

若宮

神社の
 神樂殿あり

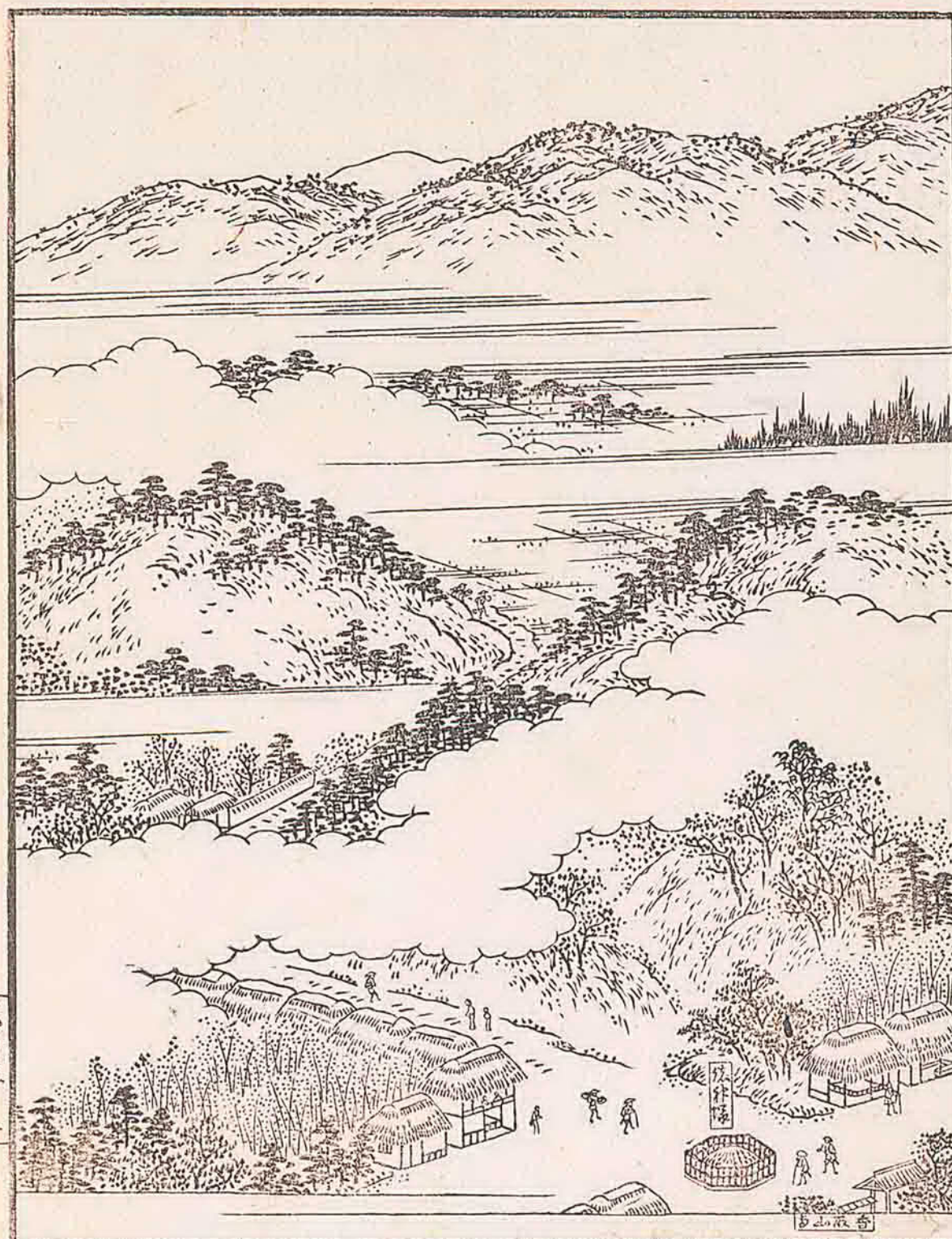
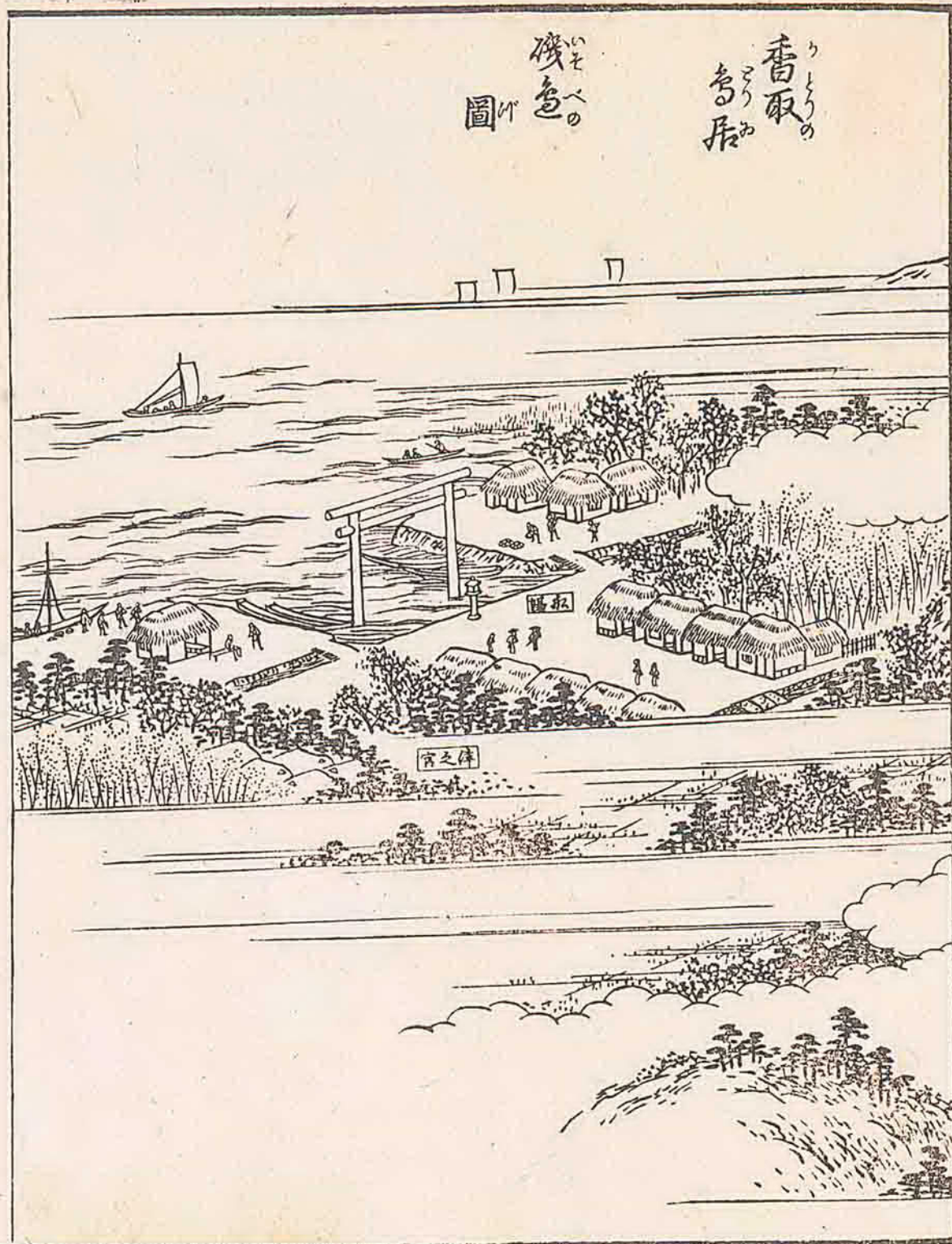
鹿島社

神社の
 子安社あり

疱瘡神

神社の右
 拜殿あり

香取の
高居
磯色
の
圖



御供所 牛社の存

樓門 豐樂殿の末にあり

香取山寺 諸神塚 日の上

神代卷云

伊弉諾尊拔所帶十握劍斬斬遇突智劍又垂血
是為天安河邊所在五百箇磐石也即此經津主
神之祖矣

又云

高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者
曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經
津主神即令平定葦原中國而後皇孫天降云

又云

天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國是
時齋主神彌齋之大人此神今在東國撒取之地
也

神書抄云

齋主祭神之主也經津主神別稱撒取地名在東

日本書紀卷九

天書云

海道下総國一作香取今為郡名故經津主号香
取明神是春日第二神殿也

經津主神者天之鎮神也其先出自諾尊初諾尊
斬遇突血成赤霧天下陰闇直達天漢化為三百

六十五度七百八十三磐石是謂星度之精也氣
化為神号曰磐裂是謂歲星之精裂生根去是謂

熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精男生磐筒
女是謂辰星之精女生經津主是謂鎮星之精

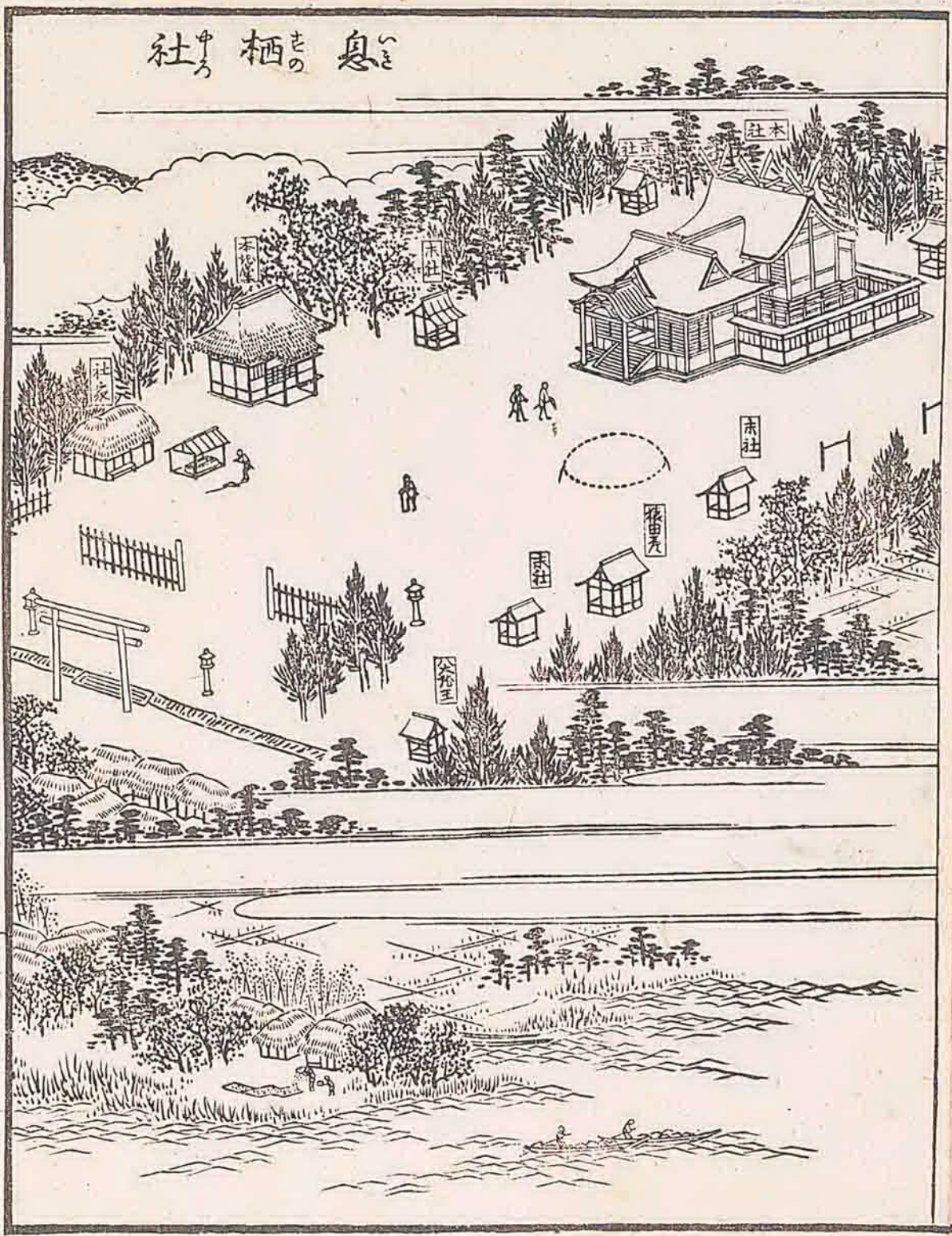
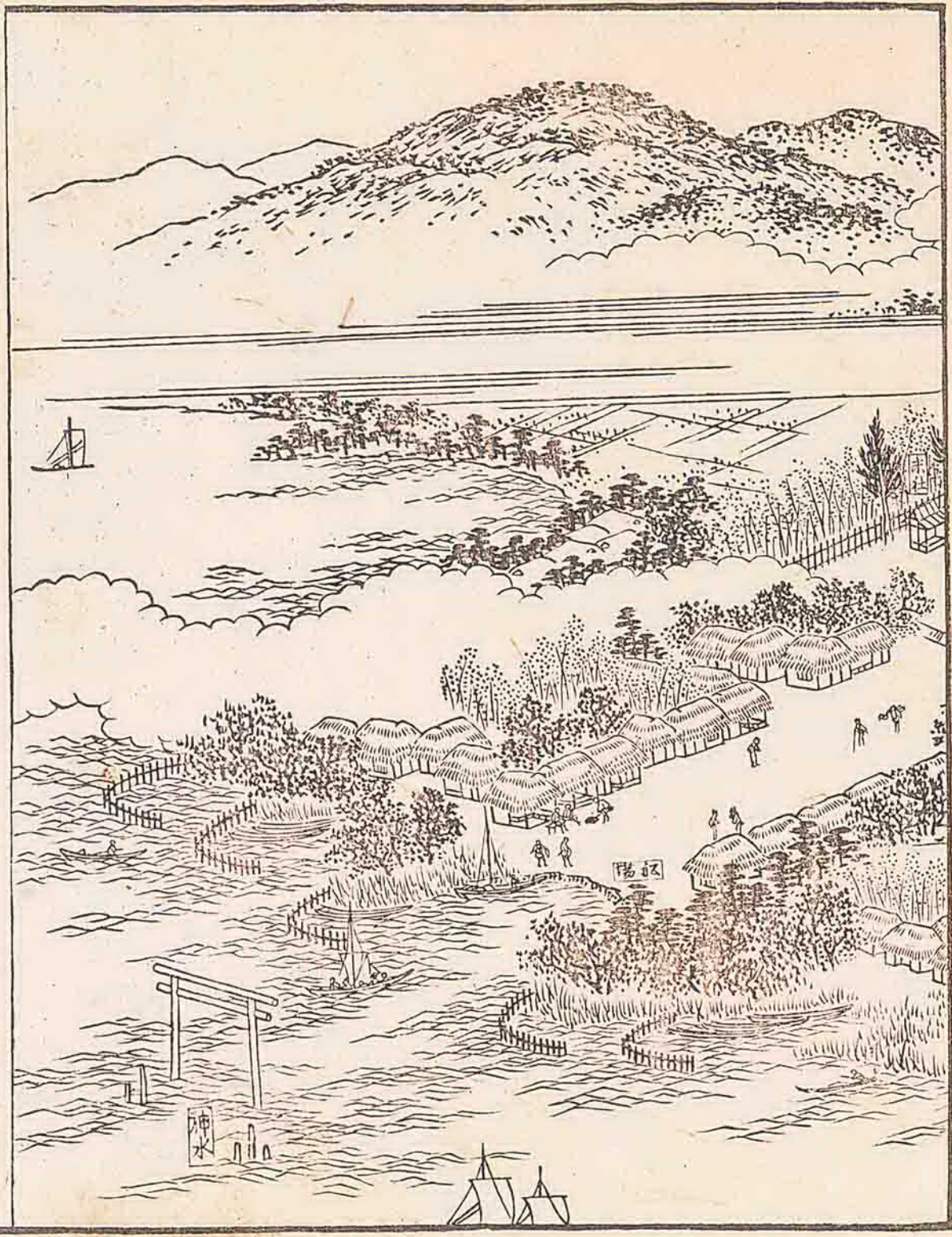
是為社之地也先新造也社傳云神代よりて神武天皇

元幸廣宮より舞臺より之を例案いひ四月八月十月小歳より之を

いんぐりね社に一千石大社宣紙香取上総分小利安を諸方深ふと云

社地廣くして小幡人多く門前の商人茶店等をあふ又防府なる

多し其社の頂より芝居相撲あつては所の権ひと形より西の國



本巻五十二

終る還幸の時武甕槌神は麻呂小宮と振威主神を撤取小宮とて神
宮渡洲の原に遷りて崇教院に異なりぬ小東國二社といふ時八太龍王
湖中より陰龍陽龍とて二ツ石井と名付られ此の金龍降る浦に
ふれ靈泉あり厥后五十一代平城天皇明神と名付られひて大同二年己
月十二日高宗内磨小勅して小神祠を建て又陰龍陽龍の靈泉に
海中より居のたむし浦に朝の中にあつて下も其の味は淡くぬ小龍の
身より小龍の神位成たなる倭勢國朝建上の昭聖井山城國賀茂の浦に
洗井は靈水と日本三箇の名泉と又神靈小龍神歟なる所の古規あり
て枝葉の模なりとて海中に潮満きたる頃の中にも水は生と平方
とれたる又祝も乾く上とて禁裏の寶庫小納りて武南社建立のそに
あふ納りたり

それより又和を渡り麻呂とてあふれ河の端に小宮とて漕り小
日科より孤帆のたうとて百川の合流勢ひせとて嶺樹千里の昭と

邊に葦葎風ふあびと凄涼なけ暮曉の暮あけり小宮天小宮人て働く
より押入海と幸名と無幡にりぬ小宮より一ふ上野國利根川幸
國より大井川系後川蠶賴川流波川等會り土人の利根川といふとこ
に流四つより下総國府川二川の内信太のあ郡の同小牛久の湖に會し
又三ふ下総相馬より二川流を本國新居より一一流會り又四橋あり流橋
大洲の香取流麻呂あり高取麻呂兩郡の界に麻呂半里あり流
神子にりぬ大津の海にりぬ

霞浦

又香取にりぬ無幡の中へ

新後松 霞のうをいせてくれあふる霞に浦のあはのいより大
新後松 白波の浦を見と蘇天の原にりぬのうに流るわうり
新後松 春まてるあふれりぬの種中て雲の浦を名もやまらん
新後松 是霞にりぬの浦をりぬれをりぬと見えぬ人をのひは
ゆく川のあふるをりぬとてまやのやあふれは浦と名もやまらん

明徳院

土御門院

後二位

定家

今より六日船中にて雲と雨の續の處所あり樹々を隔る所あり我を
 見れば一帯一帯の物々皆々びう去来し古今の事とて懐懐あり
 老子曰く海の所はと雖百谷のまより其終りの少なりつゝに終る事
 見えて魚は波の上より頭をこれあらば鬼卒論にて又我が樂し
 くらむ我國の如くは極る六日の事も免づる事東晉朝が十列の死
 小龍列東海の中にあつて地の廣さ五百里下ふ不死草瘴國の中は
 せうや其草菰苗ふゆる長三尺人己ふ死をるとんを即これ我を後
 獲かて我船よりあつてつゝ形をむねたれどもたゞ麻鰯の魚の如く
 下総の本國の如く桑陽より麻鰯中へ船路十里又ありて流波と
 十六里半船と麻鰯の原より着す外房城とて市中此農家に泊
 るる物々有るなりとて版と地とあり上るげりありて何の食料と
 こそ我は俗の本樂とて一膳一食とてあつて此中をたてて終る事を
 出たすつてこれとて舎り外房中へ翌日桑陽の者我を往て我を麻鰯の

神かん祠いふる
 市原よ路ちまで十餘町道ふさうされた墨山すみやまありて社しゃ地の所三町まちげうう

太神宮たいじんぐう 當國一之宮と稱を社領二千石
大宮司おほのみやうし 増大和守
祭神まつりかみ 武甕槌命むすねつちのみこと 延喜式名神大
月次新嘗

社
あり 卒社の心に

本社の小工

二茶樓口の
左右ふあり

内子懿王
左右又立

社
あり
橋門の外

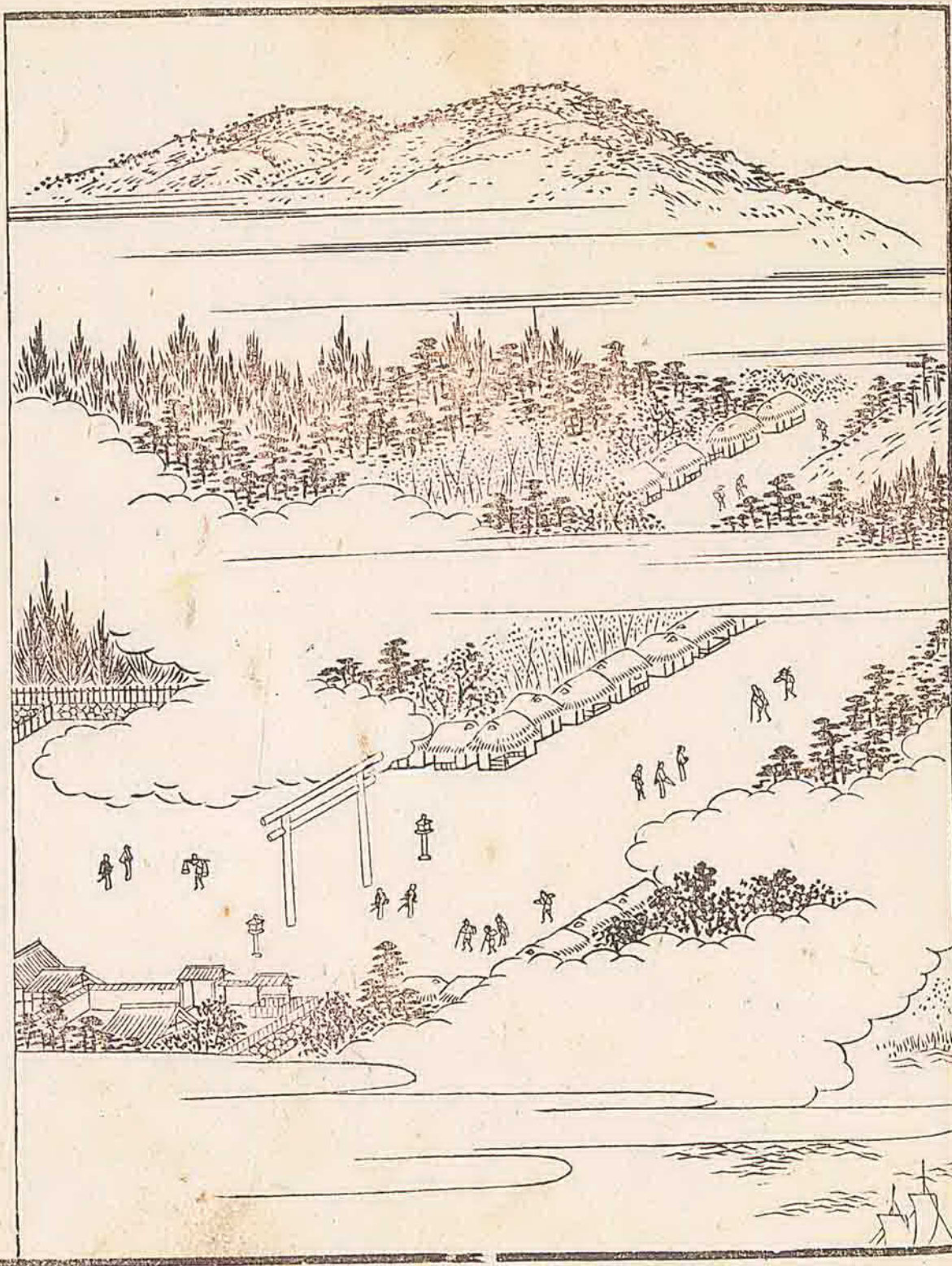
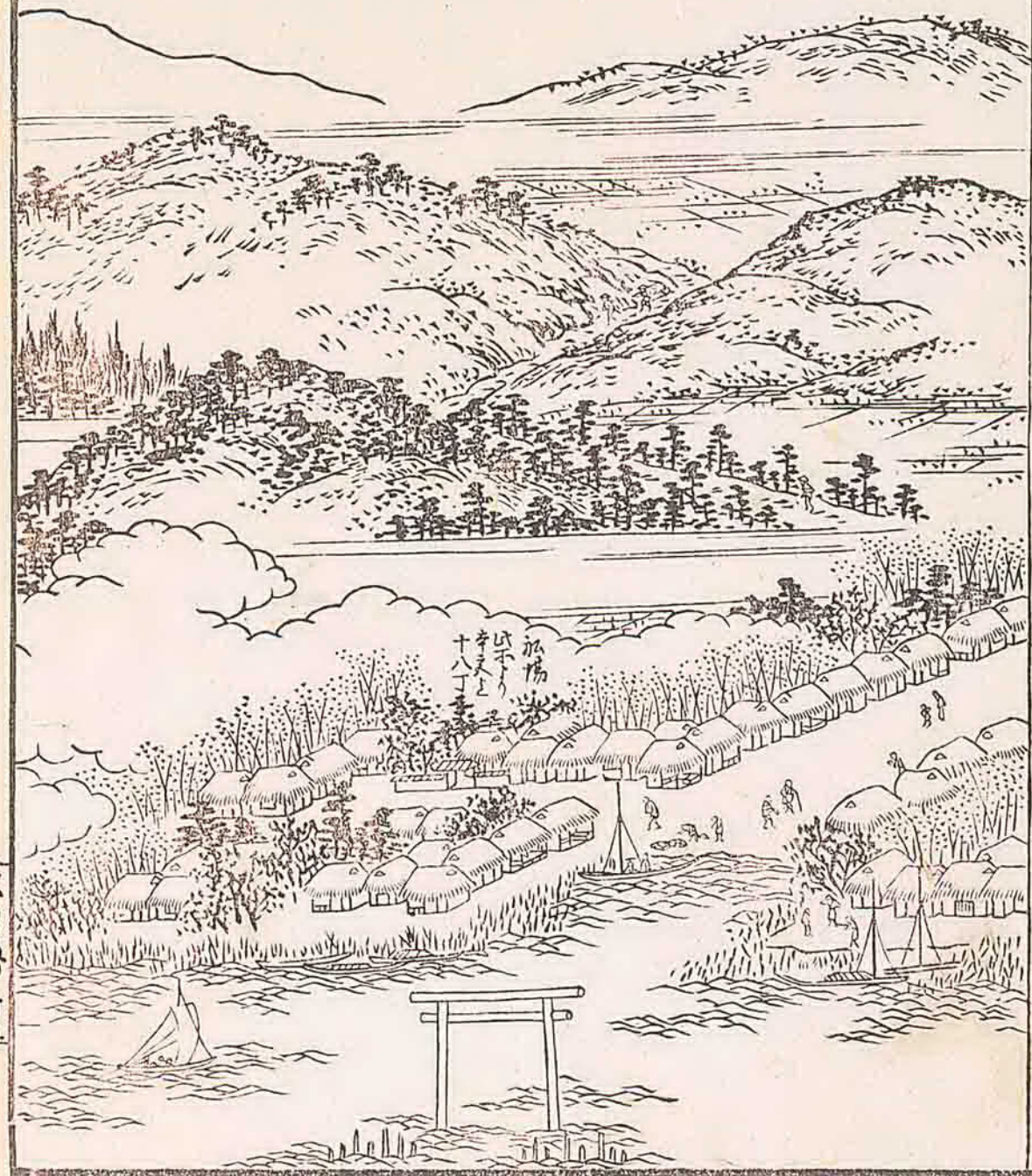
本社より

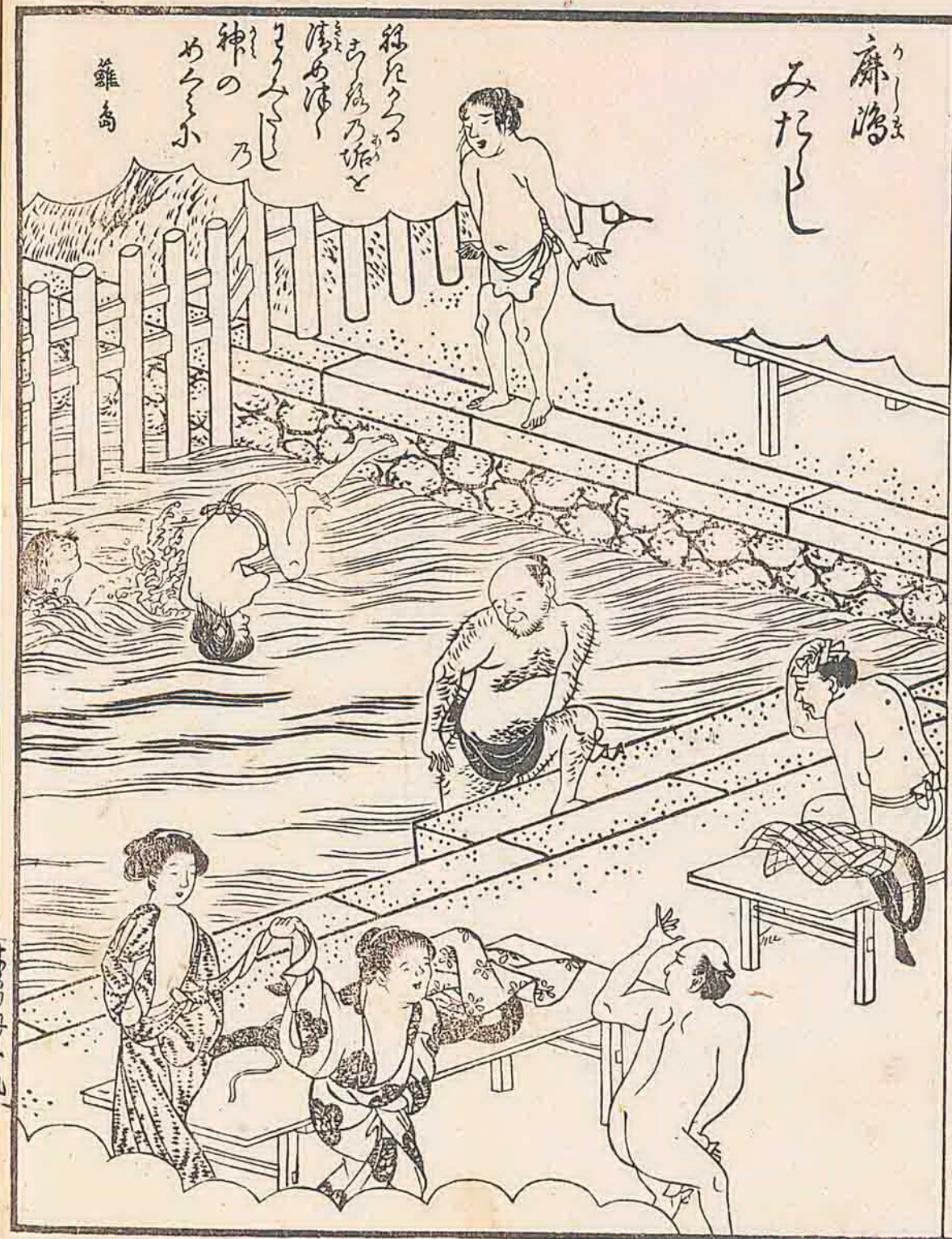
地小入る事

ちんこく
日本國

釣さば
極ふ

鹿島磯越の一鳥の井





二月月次神幸七座 所神位持

三月月次神幸七座

四月廿日 一万牝神幸

四月朔日より十五日まで奉社并末社神幸

五月赤月の晦日より尚月五日まで神幸流落馬

六月月次神幸五座

六月月次神幸七座

日 晦日 名越枝

七月三日 平國の神幸路市門出神幸より猶也

日 七日 七種神幸土用干神寶祓賜

日 十日 十一日 十二日 平國神幸

八月 新嘗會神幸

日 月次神幸七座

九月九日 重陽三神幸相撲會あり

日 月次神幸七座

十月 亥日の神幸

十一月朔日より十五日まで奉宮并末社神幸

日 月次神幸七座

十二月 初午三日神幸

日 廿七日 茶末の神幸

日 月次神幸

下畧

市経堀 奉社の後ふあり又井の馬場あり

廣圓寺 親雲重人経成記より今い経あり

赤臺子の杖はさきより國あり

鹿嶋放城 鹿嶋ふより六郎宗幹より名をこれと築きうり

そを獲りて又船に乗りて麻帆城出づ船事は乃んや舵工小舟に目
どきなり高瀬風そよぐ空吹来まじ浪走つる船をゆこあゝ悠々
とて千里を走る所のありやありや船路の好くい東ある方ふ
雲ゆくつやうて風さう海は吹く船はゆるげ楫取らるる成へま
漕ぎも押しも強く早くたぐひ事あり次舟小治の夢あくる成て
いゝ逆風はし楫を動かすをよむ板之の方へと風をとるがすち先
廉一海の方へりるべしとてゆくゆく形風の所事をなげけし
より半里も来たらん小舟へ船中もかわる事なつぜみ板久へ中
やらど水主たる腹をもちひ約めまばれらふあゝ何の益あらん
悔をもどねえ又この種までの接ぐとはばぬれたるまゝはいつかやせよ
白ひの地は付べしとせば舵工潮乾の色紙束し白ひの地に漕り小舟方
てふ所ありこの種小舟忌むるとして又櫓城立あり押し小舟を運ぶる

要石

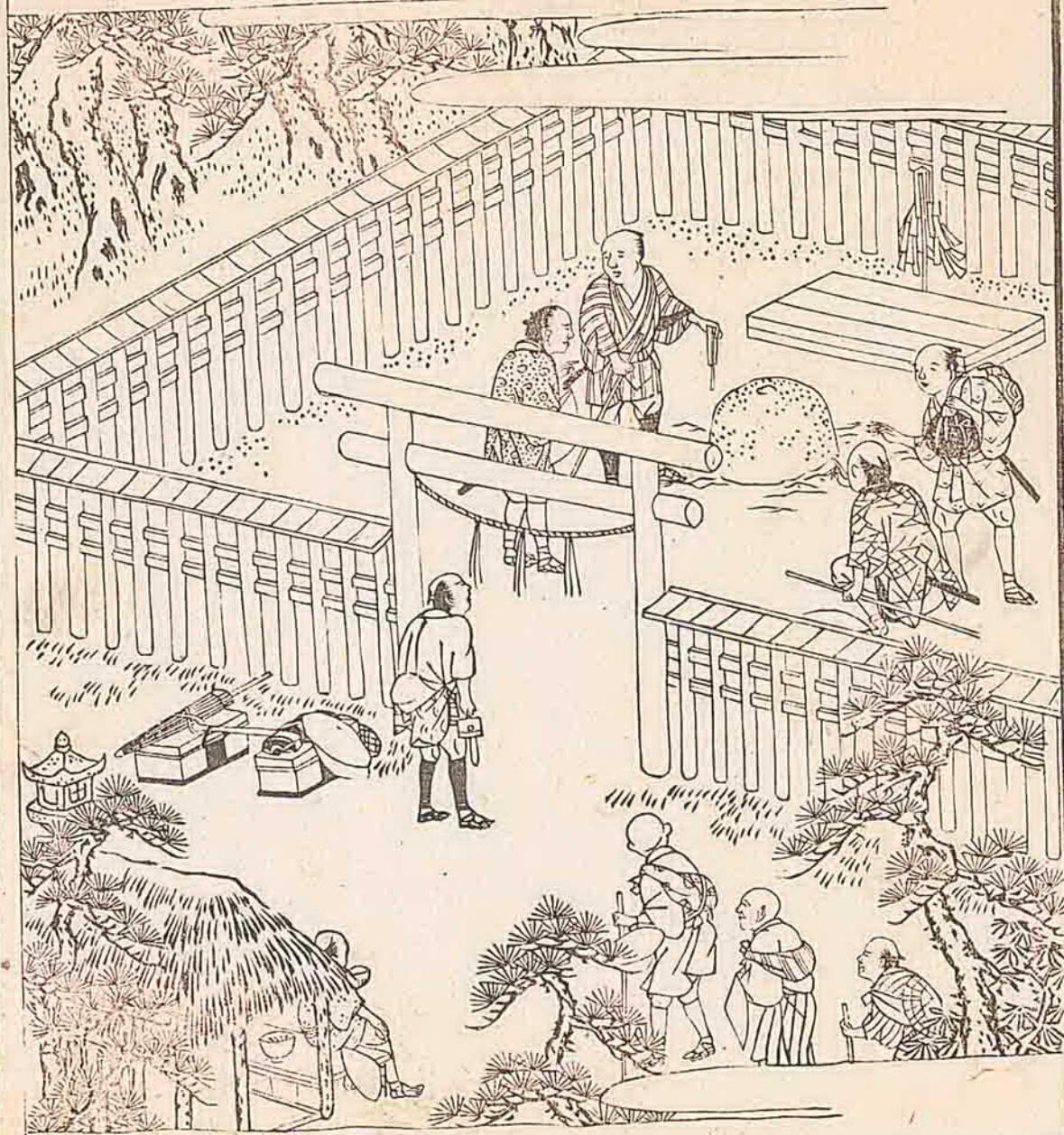
孰第に

麻乃

うふあ
うふあ

神乃

千代道



けりて延方の町小若く船をあれり教まわれり船より下りておな
かぐりて常陸持せ板久の道を尋ひありけ道付還りてゆき
此人すれりまが洲に人あひくして左のたを右のたを越え
武里許もゆけを板久の水つふ着く地を赤色いそぐつふく斜
かた十二の橋よりあつて西湖の六橋又陽彦縣の橋を長サ南七
武文橋中高くして虹の形ふ似てこれよりあを比して風色の地あり
常居を河の中へ送り又船打とてあをぬきのつてまゝ繩をひき
を俾うて川の向うなる山へあつていづる農家はむけ漆のわね
所なれどいそぎの都念の地よりいづる遊女もあつてそのの宮神傳
ふ是れいづれの川竹の音風つたきけり

人志神あやひやねとて戸垣の中へあつていづるねびのほつても
あがれり幾度あつてきつたむむむ乃の教の長成くくくぞ二和く
せうらあつてはてやあつてこれあつて一年と色くやいひ

て起もせだねもあつてあつた事れあつてもあつてもあつても
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
は潮来ぬい書律ふりてあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
よくとつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
け所の方言とてあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

スマヨく出雲の蜃身をうぐん

組風

都くはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

牛橋やをを里又潮来とも書ん

小湊よりて町に五所ありあつてもあつてもあつてもあつても

これよりを里よりいづる牛橋て所よりいづるもあつてもあつてもあつても

りけ所も又あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

都念の地よりいづるもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

ありむいへ常陸大板平國常の長一あつてあつてあつてあつてあつてあつて

常
板久
陸